

Attitudes and Behaviors towards Eating Wagashi among High School Students

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村上, 陽子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00026214

高校生における和菓子の嗜好性と食行動

—食文化継承のための教材開発を目指して—

Attitudes and Behaviors towards Eating *Wagashi* among High School Students

村上 陽子*

Yoko MURAKAMI

（平成 30 年 11 月 16 日受理）

ABSTRACT

The present study examined the attitudes and behaviors towards *wagashi*, or Japanese confectionery, among young people. The *wagashi* food preferences of 324 high school students were surveyed, including 130 males and 194 females. The following results were obtained. When palatability regarding four types of confectionery, namely western-style cake, *wagashi*, snack food, and rice crackers, were compared, the males liked a western-style cake and snack food better than *wagashi*. A majority of females highly preferred western-style cake to *wagashi*. Regarding *wagashi*, palatability was very high, while frequency of eating was low. The various properties of *wagashi*, such as taste, color, appearance, and tradition, seemed to fascinate the females in contrast to the males. The students showed high interest in making *wagashi* with their friends and families. It is expected that studying *wagashi* through the five senses will make students more interested in learning food culture.

1. 緒言

近年、伝統文化継承の重要性が叫ばれている。食文化についてみると、平成 25 年 12 月に和食がユネスコ無形文化遺産に登録される¹⁾など、国内外から和食は注目を集めている。食文化の継承については、食育基本法（平成 17 年）²⁾、改訂教育基本法（平成 18 年）³⁾、学校教育法（平成 29 年改正）⁴⁾、食に関する指導の手引き（平成 19 年）⁵⁾においてその重要性が謳われており、第 3 次食育推進基本計画（平成 28～32 年）⁶⁾では、「食育の推進に関する施策についての基本的な方針」の重点課題の 1 つに「食文化の継承に向けた食育の推進」が掲げられている。こうした流れを受けて、平成 29 年⁷⁾⁸⁾および平成 30 年⁹⁾告示の学習指導要領（以下、新学習指導要領と記す）では、伝統や文化に関する教育の充実が求められている。

食文化の継承・発展の面で期待できる伝統文化の一つとして、和菓子が挙げられる。和菓子は長い歴史の中で多様な製菓材料と技術を総合させて完成されたものであり、日本人独特の情

*家政教育系列

感や季節感を盛り込んだ、世界に類のない菓子である¹⁰⁾。

しかし、食生活の洋風化により、和菓子の喫食頻度は、特に若い世代において減少傾向にあり¹¹⁾、食文化の継承および啓発は喫食の課題である。一方、既報において、中学生¹²⁾や大学生^{13) 14)}における和菓子の嗜好性は低くないものの喫食経験が少ないこと、幼児を対象とした調査¹⁵⁾より、年少の段階から和菓子に触れることによって、和菓子の嗜好性が高まるという結果が得られている。このことから、食文化継承には、若い世代において和菓子に対する理解を深める機会を設けることが重要といえる。また、幼児では、小豆餡に対する拒否反応が強いものの¹⁵⁾、大学生では小豆餡を使った和菓子の嗜好性が高い¹³⁾ことから、和菓子の嗜好性は発達段階によって異なると考えられる。和菓子は製法や材料により、多様な種類が存在する。そのため、各年代に応じた和菓子の認知度や利用状況など詳細に把握することにより、実態に応じた、より効果的な食文化教育が可能となると思われる。そこで本稿では、和菓子を用いた、文化・伝統継承に関する食文化教材開発の一助として、高校生における各種和菓子の認知度や食経験を検討した。

2. 方法

(1) 調査対象および調査期間

静岡県立A高等学校の生徒324名(男子130名, 女子194名)を対象にアンケート調査を行った(回収率・有効回答率とも100%)。調査期間は2015年2～3月であった。

(2) 調査方法および調査内容

調査は既報¹³⁾に準じた。調査は自記式質問紙法で行い、回答は無記名・選択式とした。調査対象者に質問紙を配布し、その場で回答してもらい、ただちに回収した。尚、煎餅やあられは、分類上は和菓子の中の干菓子に属するが、予備調査においてスナック菓子とみなす人がいたため¹³⁾、混同を避けるために和菓子とは別に分類して調査した。また、煎餅については、調査時にはひらがなで表記して調査を行った。得られたデータの有意差は、母比率の差に関する検定、Kruskal-Wallis 検定、Mann-Whitney 検定、 χ^2 独立性の検定を用いた。

3. 結果および考察

(1) 菓子の嗜好性

菓子の嗜好性について、「和菓子」「洋菓子」「スナック菓子」「煎餅・あられ」の4種類の菓子について「好きな順にそれぞれ1, 2, 3, 4と順位をつけてください」という設問を立て、検討した。

全体・男子・女子いずれにおいても、菓子の種類によって嗜好性の順位に相違がみられた(Kruskal-Wallis 検定, $p < 0.01$) (図1)。各菓子間の順位に男女間で有意差があるか検討したところ(Mann-Whitney 検定)、和菓子と煎餅・あられでは男女差はなく、洋菓子 ($p < 0.01$) と

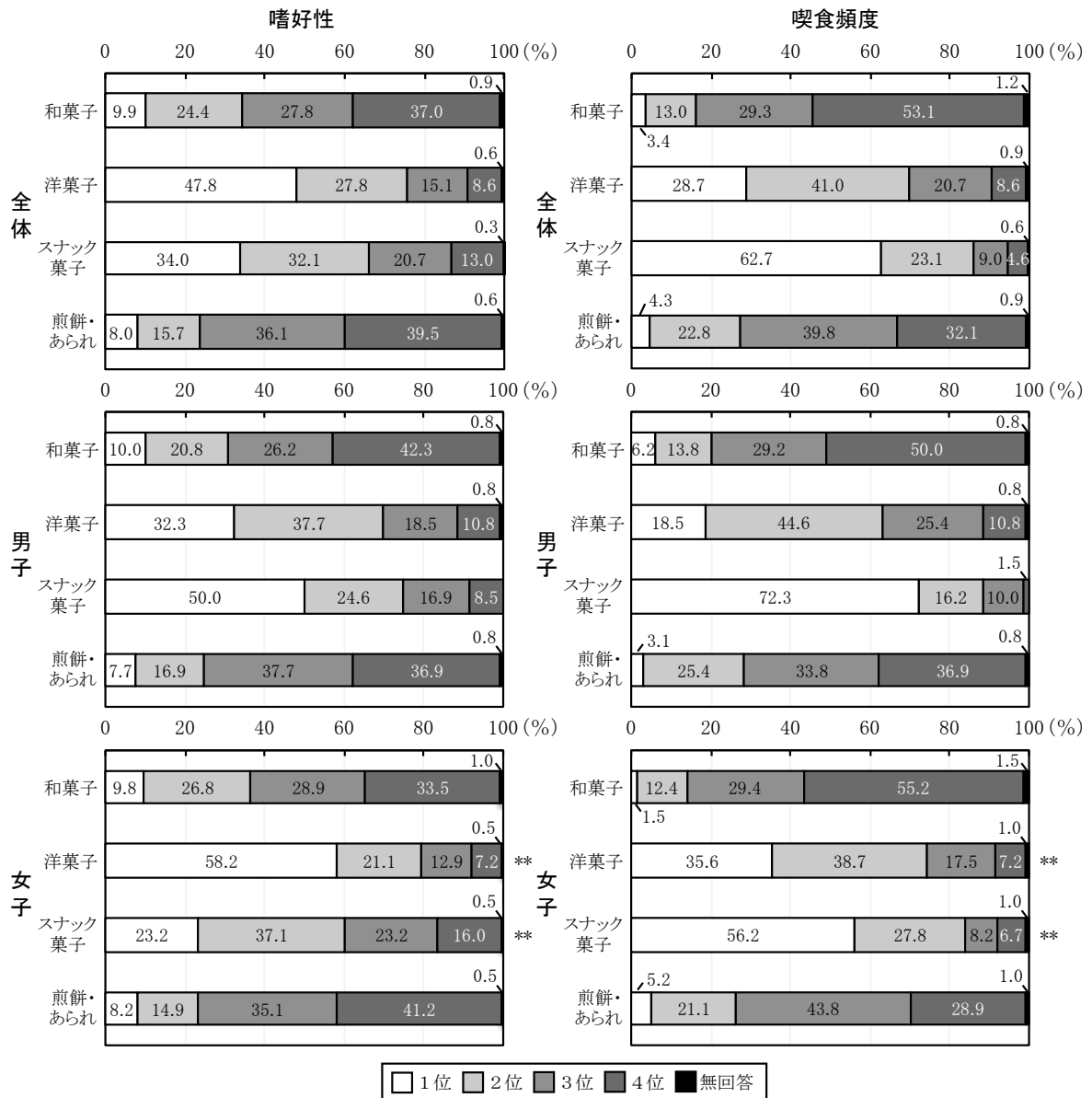


図1 菓子の嗜好性および喫食頻度

各菓子における男女間の有意差は女子のバーの横に記した (Mann-Whitney検定, * $p < 0.05$, ** $p < 0.01$)。

スナック菓子 ($p < 0.01$) に相違がみられた。詳細をみると、全体では、1位の占める割合は洋菓子が最も高く、スナック菓子、和菓子、煎餅・あられと続いた。この傾向は、女子においても同様であった。男子においてはスナック菓子が最も高く、次いで洋菓子、和菓子、煎餅・あられであった。

最も嗜好性の高い菓子を比較すると (図2)、男子ではスナック菓子、女子では洋菓子が最も好まれており、他の全ての菓子との間に有意差がみられた ($p < 0.01$)。菓子の嗜好性については男女間で相違がみられ (χ^2 検定, $p < 0.01$)、スナック菓子は男子の方が女子より高く ($p < 0.01$)、洋菓子は女子の方が男子より有意に高かった ($p < 0.01$)。和菓子、および、煎餅・あられは男女間で有意差はみられなかった。

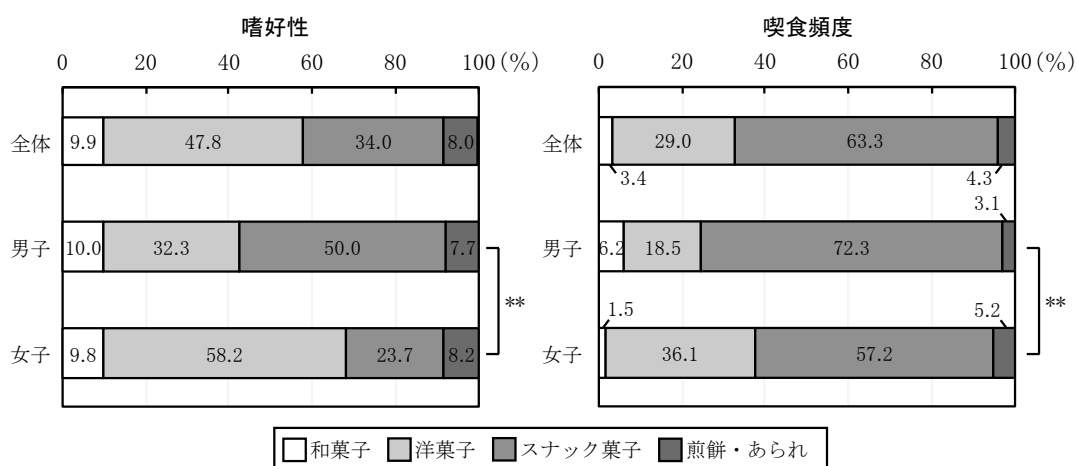


図2 嗜好性・喫食頻度の高い菓子

男女間の有意差は χ^2 検定を用いた (* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$)。

中学生の結果¹²⁾と比較すると、①洋菓子の嗜好性は女子の方が男子より有意に高い、②スナック菓子の嗜好性は男子の方が女子より高いという点が共通してみられた。これは、大学生¹³⁾とも共通していた。一方、和菓子や煎餅・あられについては、大学生の方が中学生や高校生より嗜好性が高いという点について相違がみられ^{12) 13)}、年代によって菓子の嗜好性が異なることが示唆された。

(2) 菓子の喫食頻度

各種菓子の喫食頻度について、「よく食べる順にそれぞれ1, 2, 3, 4と順位をつけてください」という設問を立て、(1)同様に検討した。

全体・男子・女子いずれにおいても、菓子により喫食頻度の順位に相違がみられた (Kruskal-Wallis 検定, すべて $p < 0.01$) (図1)。各菓子間の順位については、洋菓子とスナック菓子において男女間で有意差がみられた (Mann-Whitney 検定, $p < 0.01$)。詳細をみると、全体では、1位の占める割合はスナック菓子が最も高く、次いで洋菓子、煎餅・あられ、和菓子であった。

中学生¹²⁾の結果と比較すると、中学生では男女ともスナック菓子が6割を超えており、他の菓子より有意に高かった。また、男女間の相違をみると、中学校・高校生ともに洋菓子は女子の方が男子より有意に高かった。一方、スナック菓子は、中学生では男女間で有意差がなかったのに対し¹²⁾、高校生では有意差がみられたことから、年代によって菓子の利用状況に相違があるといえる。

最も喫食頻度の高い菓子を比較すると(図2)、男女ともスナック菓子が過半数を超えており、他の菓子より有意に高かった。また、洋菓子は女子 ($p < 0.01$)、スナック菓子は男子の方が高く ($p < 0.01$)、喫食頻度の高い菓子の種類について男女間で相違がみられた (χ^2 検定, $p < 0.01$)。こうした傾向は中学生¹²⁾でも同様であったが、中学生は煎餅・あられ ($p < 0.01$) や和菓子 ($p < 0.01$) について男子の方が女子より高かったのに対し、高校生では男女間で有意差がなく、

校種による相違がみられた。

嗜好性と関連させて考えると、嗜好性は、男子はスナック菓子、女子は洋菓子が高かったが、喫食頻度は男女ともスナック菓子が高く、嗜好性と喫食頻度は一致していなかった。その理由として、菓子にどれだけ費用をかけられるかという経済的理由（値段）と日常における行動範囲の2点が考えられる。

そこで、まず、1回あたりの菓子に出せる金額を検討した（図3）。その結果、洋菓子が他より有意に高く（ $p < 0.05$ ）、次いで和菓子と続き（ $p < 0.05$ ）、スナック菓子と煎餅・あられは低かった。平均金額をみると、全体では洋菓子 416 円、和菓子 352 円、スナック菓子 275 円、煎餅・あられ 240 円であり、洋菓子は煎餅・あられより約2倍高かった。男女間で比べると、和菓子（男子 323 円、女子 371 円）と洋菓子（男子 398 円、女子 428 円）は女子、スナック菓子（男子 300 円、女子 257 円）、煎餅・あられ（男子 252 円、女子 232 円）は男子の方が高い傾向がみられた（図3）。女子は、男子に比べて、和菓子は約50円、洋菓子は約30円高かった。

菓子類の価格は、材料の種類や産地、デザイン、作り手の技術、製造過程（手間）や製造方法、販売形態、ブランドなどに左右され、これら条件に対する要望が高いほど価格も高くなる傾向にあると考えられる。特に女子は和菓子や洋菓子について、自分の嗜好を満たすためには多く出費してもよい、あるいは、出費する必要があると考えているといえる。一方で、実際にはスナック菓子の喫食頻度が最も高いという結果から（図2）、日常においては金銭面や活動範囲の限界により、自身の嗜好性と共に経済性も考慮して行動していることが示唆された。

高校生と中学生と比較すると、中学生では男女ともスナック菓子の喫食頻度が高く、高校生より洋菓子や和菓子の利用が低かった¹²⁾。これは、菓子という嗜好品に使えるお金が年代により異なるためと考えられる。校種別の小遣いの平均金額については、中学生(2,213円)から高校生(4,967円)へ学校段階が上がるに従い、2倍以上に大幅に増加するという結果が報告されている¹⁶⁾。このことから、中学生では安価なスナック菓子を利用する割合が高く、高校になるに従い、その割合が変化するといえる。

また、年齢と行動範囲については、「子どもの生活と学びに関する親子調査2015」¹⁷⁾による

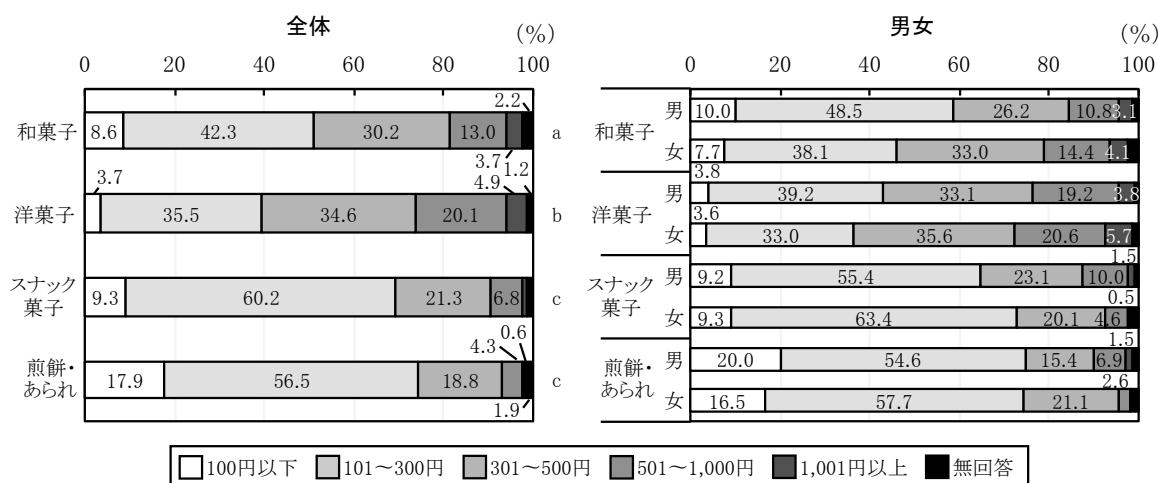


図3 1回あたりに食べる菓子に出せる金額

異なるアルファベットは有意差があることを示す ($p < 0.05$)。

と、学校段階が上がると行動範囲が拡大することが報告されている。たとえば遊ぶ場所では、小学校高学年では「自分の家」「公園や広場」など身近な場所を挙げているが、高校生は「コンビニやショッピングセンターなどの店」「ファストフード店やファミリーレストラン」などの回答が4割を超えている。

こうした行動範囲の拡大は、菓子を食べる場所とも関係していると考えられる。実際に各種菓子を喫食する場所を検討すると、スナック菓子や煎餅・あられは、自宅・学校・友人宅にほぼ限られていた(図4)。一方、和菓子や洋菓子はこれに加えて、カフェ・喫茶店、専門店、レストランなど多様な場所で喫食されており、特に洋菓子はその傾向が顕著であった。

中学生¹²⁾や大学生の結果¹³⁾ともあわせて比較すると、中学生・高校生・大学生いずれも、男子はスナック菓子の喫食頻度が高いことが示唆された。スナック菓子は安価で手軽に食べられるということからいずれの年代でも利用されており、そうした経済性や利便性は食嗜好性より優先されると考えられる。

(3) 和菓子の嗜好性とその要因

1) 和菓子の食嗜好性

和菓子の嗜好性や喫食頻度は、他の菓子と比べて低かった(図1)。これについて、和菓子自体の嗜好性が低いために喫食頻度が低下したとも考えられる。そこで、和菓子に対する嗜好性の程度について、「とても好き、やや好き、普通、あまり好きではない、嫌い」の中から1つ選

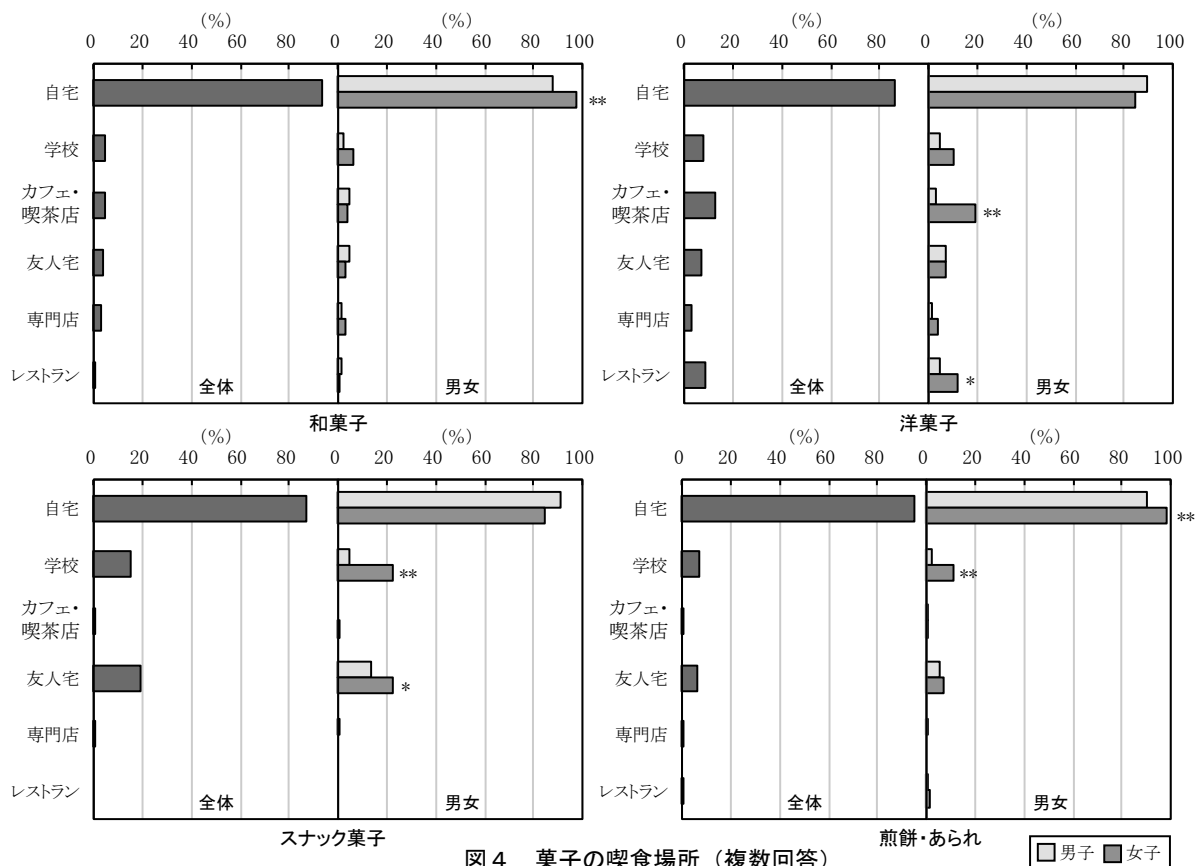


図4 菓子の喫食場所(複数回答)

項目間の男女間の有意差は、母百分率の差の検定を用い、女子のバーの上に記した(* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$)。

択してもらった。このうち、「とても好き、やや好き」を高嗜好群、「普通」を中嗜好群、「あまり好きではない、嫌い」を低嗜好群として分析した。

和菓子に着目した場合、高嗜好群の割合は男女とも過半数を超えており、女子の方が有意に高かった ($p < 0.05$)。高・中嗜好群をあわせると、男女とも約9割と高かった (図5)。このことから、若者の和菓子離れは嗜好性の低さが要因ではなく、喫食経験の有無や喫食頻度の低さが影響していると考えられる。また、中学生¹²⁾や大学生¹⁴⁾においても同様の結果が得られていたことから、和菓子の嗜好性について成長段階による変化はあまりないといえる。

2) 和菓子を好きな理由 (高嗜好群)

高・中嗜好群 (男子 119 人, 女子 174 人) を対象として、和菓子を好きな理由を検討した。選択肢として、「おいしい、甘いものが好き、自分の好みに合う、いろんな味がある、見た目がきれい、芸術的、いろんな形がある、日本の伝統的な菓子である、昔から食べ慣れている、職人の技が見事、食べる機会が多い、日本の食文化に興味がある、色づかいがきれい、色の種類が多い、おいしそうなお色、季節感が感じられる、幸せな気分になれる、懐かしい感じがする、食感がよい、手ごろな値段、使用している食材が好き、腹持ちが良い、食材に多様性がある、カロリーが低い、アレルギーが少ない、その他」を設け、複数回答とした。尚、本稿では、「日本の伝統的な菓子である」「日本の食文化に興味がある」「使用している食材が好き」はそれぞれ「伝統的な菓子である」「食文化に興味がある」「使用食材が好き」として、以下表記する。

全体では、「おいしい」が最も高く、次いで「甘いものが好き」「見た目がきれい」「伝統的な菓子である」「色づかいがきれい」であった (図6)。男女別でみると、男子では「おいしい」が最も高く、次いで「甘いものが好き」「見た目がきれい」「伝統的な菓子である」と続いた。女子では「おいしい」と「甘いものが好き」が最も高く (84.5%)、次いで「見た目がきれい」、「色づかいがきれい」であった。

男女間で比較すると、「甘いものが好き」に加えて、「見た目がきれい」「昔から食べ慣れている」「色づかいがきれい」「色の種類が多い」「季節感が感じられる」「幸せな気分になれる」「カ

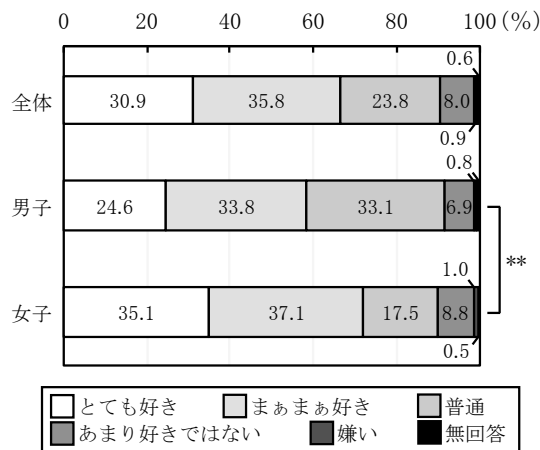


図5 和菓子の嗜好性

男女間の有意差はMann-Whitney検定を用いた (** $p < 0.01$)。

ロリーが低い」について、女子は男子より有意に高く、男女間で相違がみられた。このことから、女子は、味、見た目、色、伝統や習慣、情緒、健康など、多様な面で和菓子の魅力を感じているといえる。

中学生と比較すると、中学生では「伝統的な菓子である」は好きな理由の上位には入っていなかった¹²⁾。また、女子では、高校生は「おいしい」「甘いものが好き」が最も多かったが、中学生では「見た目がきれい」が最も高かった。これについて、「昔から食べ慣れている」という項目に着目すると、高校生では約3割が選択しているのに対し、中学生では回答がみられなかった。つまり、中学生のように喫食機会の少ない場合には、和菓子に抱くプラスのイメージは、食経験に起因するものよりも見た目の印象などによるところが大きいこと、一方で、年齢とともに和菓子の食経験や喫食機会が増えると、経験にもとづいて和菓子の嗜好を決定していくようになること、それとともに和菓子の背景にある伝統を意識するようになるといえる。

以上のことから、年代が上がるにつれて和菓子の食経験や喫食頻度が増えること、これにより和菓子の嗜好性に関わる要因が変化すること、和菓子に対する視野が広がり、食文化理解の深化に繋がることが示唆された。

3) 和菓子を嫌いな理由（低嗜好群）

和菓子を嫌いな理由について、低嗜好群を対象に検討した。選択肢として、「おいしくない、

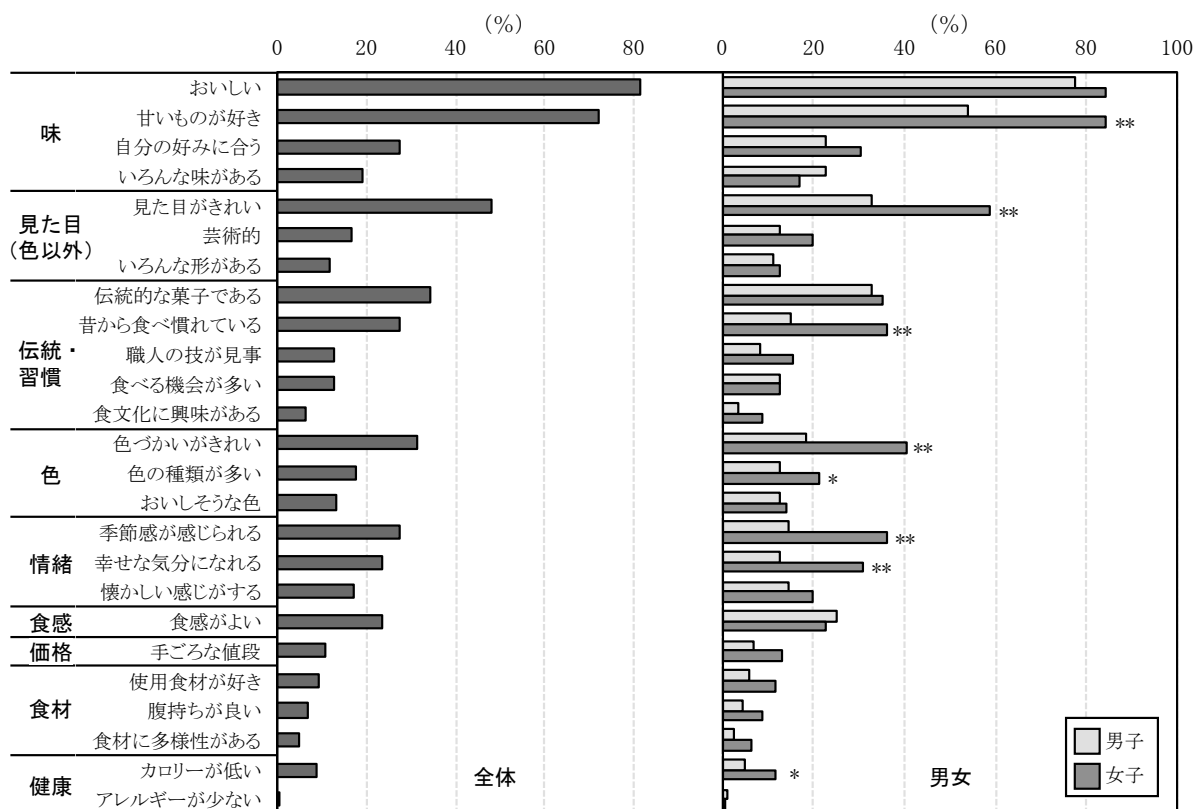


図6 和菓子を好きな理由（複数回答）

和菓子の嗜好性において「とても好き、まあまあ好き、普通」と回答した293人（男子119人、女子174人）を対象に、その理由を検討した（複数回答）。項目間の男女間の有意差は、母百分率の差の検定を用い、女子のバーの上に記した（* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$ ）。

甘いものが苦手、味が好みでない、味が単調、見た目に魅力を感じない、芸術性を感じない、形に変化がない、古い感じがする、食べた経験があまりない、職人の技に感動しない、食べる機会があまりない、日本の食文化に興味がない、堅苦しい感じがする、色づかいが好きではない、色が派手、食欲がわかない色である、季節感がない、わくわく感がない、味になじみがない、食感が嫌い、値段が高い、使われている食材が嫌い、腹持ちがよくない、食材に多様性がない、カロリーが高い、アレルギーの心配がある」を設け、複数回答とした。

全体では、「おいしくない」(44.8%)が最も多く、「味が好みでない」(37.9%)、「日本の食文化に興味がない」(27.6%)、「食べた経験があまりない」(24.1%)、「使われている食材が嫌い」(24.1%)、「食べる機会があまりない」(20.7%)が多かった。

このことから、和菓子の嗜好性を低下させる要因として、「おいしくない」や「味が好みでない」など味に関する要因に加えて、「日本の食文化に興味がない」などの関心の低さや、「食べた経験があまりない」「食べる機会があまりない」などの経験不足および喫食頻度の少なさを理由に挙げる者が多いといえる。

こうした傾向は中学生でも同様であったが、中学生では「おいしくない」「食べる機会がない」「食べた経験があまりない」「日本の食文化に興味が無い」「古い感じがする」など、「おいしくない」という回答以外は経験に基づかないものであった¹²⁾。このことから、和菓子の嗜好性の低さは、中学生・高校生いずれも食経験の低さや経験不足によるところが大きい、特に中学生ではこれに起因する和菓子のもつイメージに嗜好が左右されるといえる。一方、高校生は実際に経験した上で嗜好にあわないものがあると判断するなどしており、両者で相違がみられた。和菓子には様々な種類があるため、和菓子に対する理解を深めることにより、和菓子の食経験や喫食頻度をさらに増やすことができると考えられる。また、自分の嗜好にあった和菓子を作るなどの活動を通して、和菓子の魅力を知り、嗜好性の向上に繋がると考えられる。

(4) 和菓子の喫食機会

和菓子の喫食機会について検討するために、「おやつ、特に決まっていない、食後のデザート、節句、家族や親戚との食事、お茶会、冠婚葬祭、祭事(クリスマス等)、部活動、友人との会食、誕生日、ご飯の代用、式典(入学式、卒業式)、全く食べない、無回答」の中から選択してもらった(複数回答)。回答に際しては、経験回数や経験時期などは制限しなかった。

全体では、「おやつ」が最も多く(51.5%)、「特に決まっていない」(44.4%)、「食後のデザート」(25.6%)と続いた(図7)。

和菓子は、年中行事や人生儀礼と深い結びつきがある¹⁸⁾。こうしたハレの日にはそれぞれに決められた特別な食べ物があり、祝いの行事が家庭や地域で行われている¹⁹⁾。各行事には和菓子が食べられることも多く、ひな祭りの菱餅や端午の節句のちまき・柏餅のように、その日にまつわるものが多い。初節句や成人、結婚、出産、葬式など人生の節目の日にも、和菓子は不可欠である¹⁸⁾。和菓子の喫食機会を日常・非日常(ハレとケ)という視点からみた場合、中学生ではハレにあたる「節句」が約4割であったが¹²⁾、高校生では約2割であり、中学生の方がハレの日における利用が多いことが示唆された。一方、大学生¹³⁾では、「おやつ」「食後のデザ

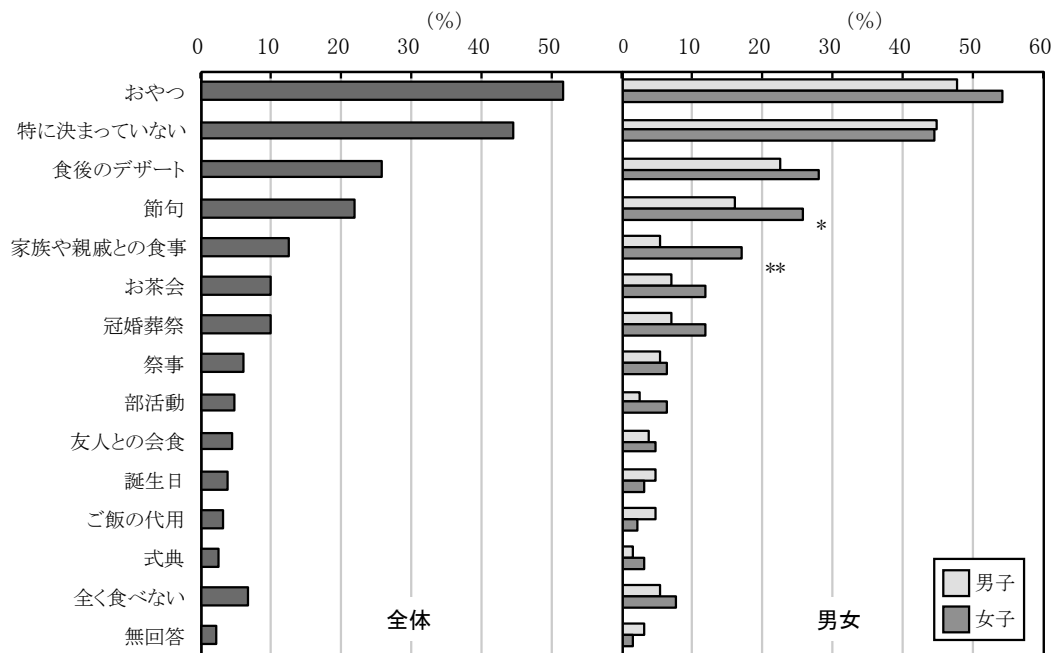


図7 和菓子を食べる機会 (複数回答)

項目間の男女間の有意差は、母百分率の差の検定を用い、女子のバーの上に記した (* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$)。

ート」という回答が多く、日常での喫食機会が多かった。和菓子に対する食行動について、家族と一緒に暮らしている中学生は、家庭で年中行事を行ったり、家族や親戚などの人生儀礼を祝ったりする機会があり、そうしたハレの日に和菓子を食すると思われる。一方、一人暮らしをしている割合が多い大学生ではこうした行事に則ることが少なくなり、高校生は中学生と大学生の中間にあたりと考えられる。以上より、世代によって喫食機会に相違があるといえる。

(5) 和菓子の購入

1) 和菓子の購入方法

和菓子の購入方法について、「家族が買う、自分で買う、友人が買う、親戚からもらう、行事でもらう、部活や習い事、その他」の中から選択してもらった (複数回答)。ここでは「(4) 和菓子の喫食機会」で「全く食べない」「無回答」とした者を除いて分析した (男子 119 人、女子 176 人)。

全体では、「家族が買う」が最も多く、次いで「自分で買う」であり、いずれも6割を超えていた (図8)。男女別にみると、男子では、「家族が買う」が最も多く (83.2%)、「親戚からもらう」と続いた。女子では、「自分で買う」(88.6%) が最も多く、次いで「家族が買う」、「友人が買う」であった。「自分で買う」「友人が買う」「行事でもらう」は女子、「家族が買う」「親戚からもらう」は男子が有意に高かった。特に「自分で買う」は、男子では37.8%であり、女子と50%以上の差があったことから、女子の方が和菓子の購買意欲が高いといえる。

2) 購入場所

和菓子の購入場所について、「スーパー、コンビニ、和菓子専門店、デパート、洋菓子専門店、カフェ・喫茶店、通信販売、その他」の中から選択してもらった（複数回答）。

全体では、「スーパー」が最も多く（72.5%）、次いで「コンビニ」であった（図8）。男女別にみると、男子では、「スーパー」と「コンビニ」が多かった。女子は、「スーパー」に次いで「和菓子専門店」が多く、「和菓子専門店」や「カフェ・喫茶店」では女子が男子よりも有意に高かった。女子は、スーパーやコンビニなどで気軽に楽しむ一方で、専門店でも購入するなど、男子よりも購入場所が多様であり、TPOに応じて利用の仕方を変えているといえる。

(6) 和菓子製作について

和菓子製作時に「一緒に作りたい人」「作りたい場所」「作りたいもの」について検討した。

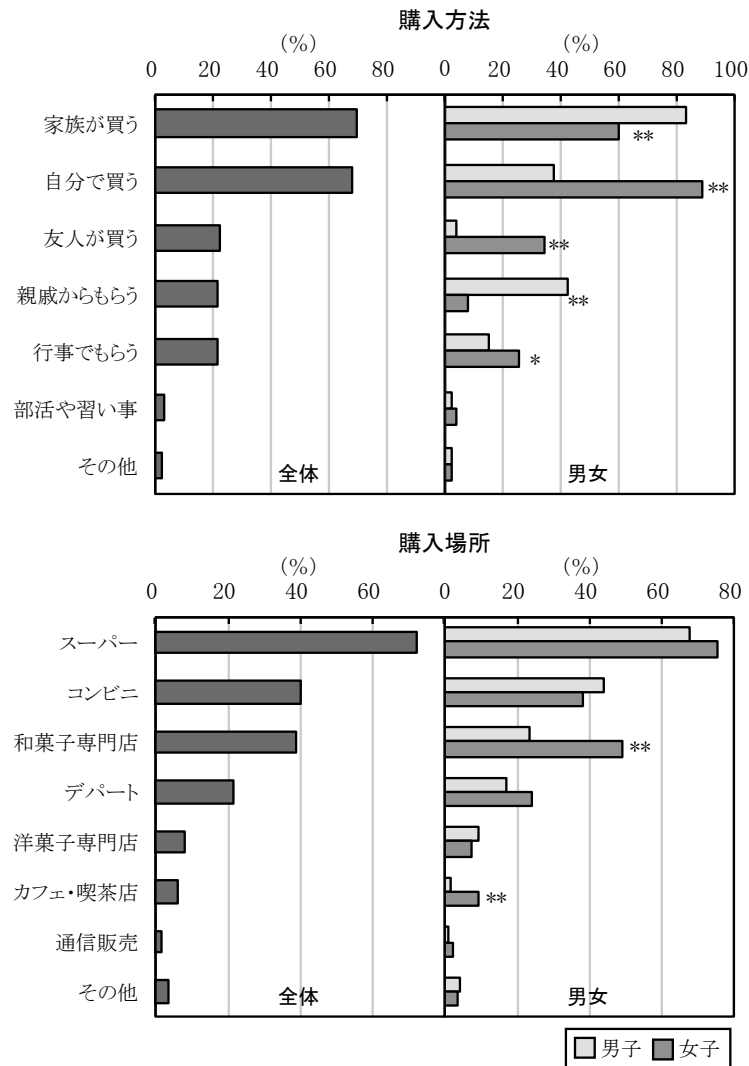


図8 和菓子の購入方法と購入場所（複数回答）

項目間の男女間の有意差は、母百分率の差の検定を用い、女子のバーの上に記した（* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$ ）。尚、和菓子の喫食について「全く食べない、無回答」とした者を除いて分析した（男子119人、女子176人）。

選択肢として、設問「もし和菓子を作るなら、誰と一緒に作りたいですか」では「友人、自分一人、家族、和菓子職人、学校の先生」、設問「もし和菓子を作るなら、どこで作りたいですか」では「家、和菓子店、友人宅、学校、料理教室」、設問「もし和菓子を作るなら、どんな和菓子を作りたいですか」では「簡単なもの、本格的なもの、食べたことのあるもの、食べたことがないもの」の回答の中から、それぞれ複数回答で選択してもらった。

「一緒に作りたい人」では、全体・男女とも「友人」が最も多かった(図9)。男子では、次いで「自分一人」と続き、「家族」「和菓子職人」であった。女子では「家族」が2番目に多く、男子に比べて有意に高かった($p < 0.01$)。男女とも、「学校の先生」は著しく低かった。

中学生も、全体・男女とも「友人」が最も多かったのは同様であったが、次いで男子では「和菓子職人」「家族」「自分一人」と続いた¹²⁾のに対し、高校生では「自分一人」が2番目に多かった。女子では、中学生・高校生ともに2番目に多いのは「家族」であったが、高校生では次いで「自分一人」「和菓子職人」と続いたのに対し、中学生では「和菓子職人」「自分一人」の順であり、「自分一人」の順位は男女とも高校生の方が中学生より高かった。このことから、中学生・高校生とも、誰か他の人と一緒に作りたいと考えているが、高校生では「自分一人」でも作ってみようとする主体性がより強くみられるといえる。

「作りたい場所」では、全体・男女とも「家」が最も高く、過半数を超えていた(図9)。男女を比較すると、女子は和菓子店や料理教室の割合が約2割であり、男子よりも高かった。先述した和菓子の購入場所(図8)から、女子は身近なスーパーを利用する一方で、本格的な和菓子店などを利用しており、男子よりも和菓子に対する興味が高いと考えられる。そのため、本格的な製作が期待できる和菓子店や料理教室を選んだと考えられる。

そこで、「作りたいもの」の内容をみると、女子は、男子よりも「本格的」で「食べたことのないもの」を作りたいと考えていることが明らかとなった(図9)。こうした傾向は、製作意欲の差(作りたい、作りたくない)によらず大きかった。

(7) 和菓子製作と食文化継承

現行の高等学校学習指導要領総則(平成22年告示)では、教育課程編成の一般方針として、伝統・文化の尊重と、個性豊かな文化の創造が求められている²⁰⁾。また、食育の推進を図る視点から、高等学校学習指導要領・家庭編²¹⁾では、日本の生活文化に関わる内容と食育の推進が重視されている。さらに、食育の推進を図る視点から、実践的・体験的活動を通して、栄養、食品、調理及び食品衛生について科学的に理解させ、知識と技術を調理実習等を通して身につけさせることが重視されている²¹⁾。

これは、新学習指導要領(平成30年告示)においても同様であり、家庭科では「家庭基礎」「家庭総合」ともに、日本の生活文化の継承・創造に関する学習活動の充実が図られている²²⁾。また、家庭科の目標を達成するために、理論のみの学習に終わることなく、調理、製作等の実習などの実践的・体験的な学習活動を通して学習することにより、習得した知識及び技能が生徒自らの生活に活用することが求められている²²⁾。

一方で、伝統文化に関して、保護者が子どもに重視することとして、小・中・高いずれの校

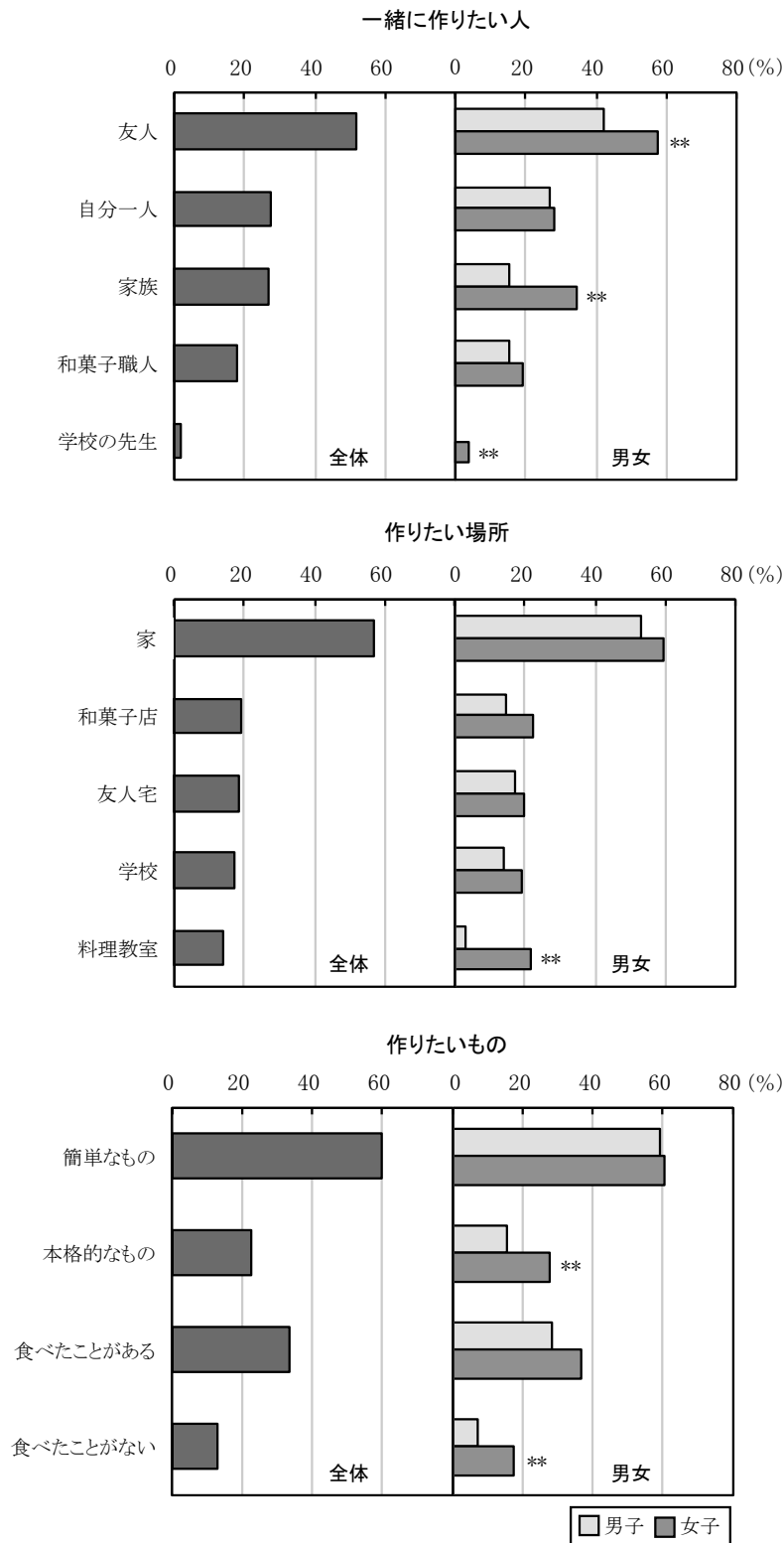


図9 和菓子を作りたい人・場所・もの（複数回答）

項目間の男女間の有意差は、母百分率の差の検定を用い、女子のバーの上に記した (* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$)。

種においても「日本の文化や伝統にふれること」「外国の文化にふれること」は1割未満であり、「文化的経験」は低いという結果が報告されている¹⁷⁾。伝統・文化継承のためには、学校教育の果たすべき役割は大きく、和菓子を用いた食育はその一翼を担うと考えられる。特に和菓子製作の学習は、文化に触れる体験的活動であり、文化継承の寄与につながる。和菓子は種類も多いため、自分の嗜好や技能に応じたものを作ることでもできる。和菓子製作を行う場合、実際に自分が利用している和菓子屋の職人を招いて学習することにより、和菓子の文化的価値を見出すとともに、地域に伝わる和菓子の理解といった郷土の食文化理解を促すこともできる。さらに、地域に対する理解を深め、地域の社会資源の活用や地域との連携にも繋がる。また、友人と作ることでコミュニケーションを深め、家庭と連携することで、家庭における食文化教育の一助となると考えられる。以上のことから、和菓子製作を授業に取り入れることは、子どもたちの食文化に対する興味関心の向上に寄与するといえる。それと同時に、学校・家庭・地域社会とも連携することにより、これら3者の関わり合いが深まり、より充実した伝統教育・食文化教育につながると考えられる。

和菓子は、地域性や時代背景、季節感、文化などが和菓子に深く関わる一方で、つくり手の自由な発想から生まれる菓子であるため、使う材料や配合、形や大きさも様々であり¹⁸⁾、和菓子を楽しむ要素は限りなくある¹⁸⁾。こうした和菓子の側面を伝えるために、和菓子を作る経験を持つことは肝要であるといえる。今後は、子どもたちの興味関心に応じて和菓子製作を行うことにより、和菓子に対する関心を高めていく。これにより、日常における喫食経験と喫食機会を増やし、和菓子の理解、食文化理解へとつなげていく。

4. まとめ

本研究では、食文化の伝承の一助として和菓子に着目し、高校生を対象としてその食嗜好性と喫食品度について検討した。

菓子の嗜好性について、男子はスナック菓子、女子は洋菓子の嗜好性が高かった。菓子の喫食頻度は、男女ともスナック菓子が最も高く、和菓子は低かった。和菓子に着目して嗜好性を検討すると、男女とも和菓子の嗜好性は高かった。

和菓子の魅力として、女子は、味・見た目・伝統など多様な面を挙げていた。和菓子の嗜好性が低い要因として、味、喫食経験の欠如や不足が挙げられていた。和菓子の興味関心を高め、嗜好性を向上させるためには、多様な視点から和菓子を学ぶ機会を設けること、喫食機会や作る機会を増やすことが求められるといえる。和菓子は、我が国の伝統文化であるため、和菓子の学ぶことにより食文化の理解を深め、食文化の継承に繋げることが可能であると思われる。今後は、和菓子を用いた食育教材の実践を行っていく予定である。

本研究は JSPS 科研費（課題番号 24500941）の助成を受けたものである。調査にご協力いただきましたA高等学校の生徒の皆様には深謝致します。尚、本研究の一部は守田知世さんと山下夢乃さん（当時、静岡大学4年）の尽力による。

参考文献・引用文献

- 1) 農林水産省：「和食」がユネスコ無形文化遺産に登録されました！
<http://www.maff.go.jp/keikaku/syokubunka/ich/> (2013/12/4 取得)
- 2) 農林水産省：食育基本法（平成 27 年 9 月 11 日最終改正）
http://www.maff.go.jp/j/syokuiku/pdf/kihonho_28.pdf (2015/9/11 取得)
- 3) 文部科学省：改正教育基本法における規定
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo7/shiryo/attach/1409339.htm (2006/2/2 取得)
- 4) 文部科学省：学校教育法等の一部を改正する法律，http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2017/04/03/1237942_003.pdf (2007/6/27 取得)
- 5) 文部科学省：食に関する指導の手引―第 1 次改訂版―，pp. 1-13，東山書房（2010）
- 6) 内閣府：第 3 次食育推進基本計画，<http://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9929094/www8.cao.go.jp/syokuiku/about/plan/pdf/3kihonkeikaku.pdf> (2016/3/18 取得)
- 7) 文部科学省：小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 総則編，pp. 28-29，東洋館出版社（2018）
- 8) 文部科学省：中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 総則編，pp. 28-29，東山書房（2018）
- 9) 文部科学省：高等学校学習指導要領解説 総則編，pp. 32-34，http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/07/13/1407073_01.pdf (2018)
- 10) 芳賀登，石川寛子監修：全集日本の食文化 6 和菓子・茶・酒，雄山閣，pp. 5-6（1996）
- 11) 全国菓子工業組合連合会：お菓子の生産や消費「世帯主の年齢別でお菓子の消費を見た場合」，<http://www.zenkaren.net/wp-content/uploads/2013/02/331324c59980.pdf> (2018/7/9 取得)
- 12) 村上陽子：中学生における和菓子の食嗜好性と食行動，日本食育学会誌，**8**，263-272（2014）
- 13) 村上陽子：和菓子の嗜好性および喫食状況に関する研究，静岡大学教育学部研究報告自然科学篇，**59**，21-36（2008）
- 14) 村上陽子：大学生における和菓子の食嗜好性について，静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要，**17**，65-74（2009）
- 15) 村上陽子：幼稚園児における和菓子の食嗜好と食行動，家政学研究，**116**，4-14（2012）
- 16) ベネッセ教育総合研究所：子どもの生活と学びに関する親子調査 2015-2017，
https://berd.benesse.jp/up_images/research/All_oyako_tyosa_2015_2017_web.pdf(2018/5/31 発行)
- 17) ベネッセ教育総合研究所：子どもの生活と学びに関する親子調査 2015，
https://berd.benesse.jp/up_images/research/kodomoseikatsu_digest_web_all.pdf (2016/3/14 発行)
- 18) 藪光生：和菓子噺，p. 15，p. 17，pp. 33-36，キクロス（2006）
- 19) 江原絢子，石川尚子編著：日本の食文化―その伝承と食の教育―，アイ・ケイ・コーポレーション，pp. 71-73，pp. 141-145（2009）
- 20) 文部科学省：高等学校学習指導要領解説 総則編（平成 21 年），p. 3，東山書房（2009）
- 21) 文部科学省：高等学校学習指導要領解説家庭編（平成 22 年），pp. 3-4，開隆堂（2010）
- 22) 文部科学省：高等学校学習指導要領解説 家庭編，pp. 11-13，<http://www.mext.go.jp/>

component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2018/07/17/1407073_10.pdf

(2018年7月)

23) 日本放送協会・NHK 出版編集：彩りの和菓子 春紀行，p. 63, p. 84, NHK 出版 (2011)